「あひるの会」設立２０周年記念誌　より

「あひるの会」のはじまり

1991 年 3 月 16 日、かつて那覇市首里石嶺にあった「ツヤマ水泳教室」の事務室で、スタッフは初めて顔を合わせました。「療育施設を卒園した重い障害のあるこどもたちが、地域で過ごす場がほしい」という、ある保育士（饒平名和子先生：元那覇市療育センター保育士）の一言がきっかけで、熱い思いのある**若い**スタッフが集まり「あひるの会」は結成されました。そしてその「ツヤマ水泳教室」において 5 月 11 日、親子 8 組が参加して第一回目の「あひるの会」水泳教室が開催されました。

「あひるの会」のネーミング

あひるは水面上をスイスイと楽しそうに泳ぎまわります。しかし、表面からは見えない水の中では、水かきを一生懸命に動かしながら動きをコントロールしています。陸上では重力の重みに抵抗できずに、動くことが困難な重い障害のあるこどもたちも、水中では重力から解放され、わずかな力で体を動かすことができます。どんなに重い障害があっても、水中で一生懸命に体を動かし、動きを楽しむことができる様子をあひるにたとえて、「あひるの会」と命名しました。

「あひるの会」の発展

当初「ツヤマ水泳教室」で開催されていた水泳教室は 1993 年 5 月から、現在の活動拠点である「サンアビリティーズうらそえ」での開催になりました。指導スタッフは設立当初からのメンバーであり、**高齢化**が問題になっており、会活動を今後も継続するにあたり、指導者の育成が大きな課題となっています。また、活動を広げていくためには、今後、NPO 法人化などを検討していく必要があると考えています。

こどもたちもスタッフも生活の一部になっているあひるの会の親子水泳教室は二十歳（はたち）を迎え、活動全体が一羽のあひるのように成長を続けています。これからも、その成長が楽しみです。

設立当時の活動

1991 年

3 月 16 日	スタッフ初顔合わせ「水泳教室開催について」会議 「あひるの会」設立
4 月 6 日	第 1 回スタッフ学習会「障害の理解」（酒井）
5 月 11 日	ツヤマ水泳教室において第 1 回水泳教室開催　参加親子 8 組
6 月 22 日	スタッフ会議「活動方針について」
9 月 28 日	スタッフ学習会「てんかんについて」（酒井）

1992 年

3 月 28 日	スタッフ会議「開催要項および会則の整備について」
3 月末日	1991 年度実績　　会員 8 組 年間開催 40 回 1 回の参加平均 5～6 組
7 月 11 日	スタッフ学習会「障害の理解２」（玉城）
8 月 8 日	講演会「自閉症児の水泳指導」開催 講師：西園洋先生（済美会指導員） 対象：沖縄県内のスイミングスクール指導者 会場：那覇市療育センター

8 月 29 日　　スタッフ学習会「障害の理解３」（酒井）
10 月 30 日　　スタッフ学習会「水泳指導の実施内容について」（津山）
11 月 14 日　　第 1 回総会開催（以後 19〇〇年まで年一回開催）

1993 年

2 月 13 日　　スタッフ学習会「重症児の医療的管理」（酒井）
2 月～3 月　　抄読会「発達障害児の水泳療法と指導の実際」
3 月末日　　1992 年度実績　　会員 20 組
　　年間開催 38 回
　　1 回の参加平均 7.6 組
7 月　　スタッフ県外研修（酒井）
　　内容：障害児水泳指導の実際
　　場所：心身障害児総合医療療育センター

1994 年

1 月　　アンケート調査
　　内容：一般の水泳教室での障害児の受け入れ状況
　　対象：県内のスイミングスクール 24 ヶ所
3 月末日　　1993 年度実績　　会員 20 組
　　年間開催 46 回
　　1 回の参加平均 10 組
4 月 23 日　　アンケート調査結果の発表
　　沖縄小児保健学会において
　　テーマ「障害児水泳教室の取り組み」（酒井）
8 月　　スタッフ県外研修（津山、柴田）
　　内容：障害児水泳指導の実技研修
　　場所：全国心身障害児福祉財団中央愛児園
10 月　　講演会「障害児水泳指導の実際」
　　講師：覚張秀樹先生（心身障害児総合医療療育センター）
　　会場：那覇市療育センター

1995 年

3 月 19 日　　サンアビリティーズうらそえ「利用者のつどい」において

	優良利用団体表彰を受ける
3 月末日	1994 年度実績　　会員 26 組 年間開催 48 回 1 回の参加平均 8 組
6 月 9 日	日本理学療法士学会において発表 「地域療育としての障害児水泳教室の実践」（酒井）
7 月 29 日	ビーチパーティーおよび宿泊研修（恩納村）
9 月 22 日	重度障害児デイケア『Steps』(ステップス)開校～96 年

1993～1995 年	那覇市地域福祉基金助成金

2000 年	宇流麻(うるま)福祉基金助成金

2002 年

5 月 18 日	「沖縄小児保健賞」受賞

2004 年

3 月 27・28 日	「障碍児・者者水泳療法指導者講習会」開催 講師：覚張秀樹先生（東京女子体育大学助教授） 会場：マリンピアザ沖縄（本部町） 共催：NPO 法人「シーカナリー」

1993 年の**若い**スタッフたち（ツヤマ水泳教室の事務所にて）

1995 年 9 月 22 日　重度障害児デイケア『Steps』（ステップス）開校式
（那覇市総合福祉センターにて）

「あひるの会」では 1995 年から 96 年にかけて「重度障害児デイケア『Steps』（ステップス）」を開校しました。これは重い障害のために訪問教育を余儀なくされていたこどもたちに、定期的な集団活動と社会参加の場を提供するために開催されました。

当時の訪問教育は週二回、二時間、先生が自宅を訪問して授業をおこなうというものであり、在籍する学校に通学することはできませんできた。

このこどもたちは医療的ケアなどを必要とはするものの、少しの支援があれば普通に外出したり活動することができ、またその刺激が生活の意欲を高めることにつながります。『Steps』のこどもたちはこの活動をとおして普通の生活ができることを実践し、学校への通学を実現することができました。

また、保護者の城間さんや金城さんは、その後「沖縄訪問教育親の会」を立ち上げ、さまざまな活動をとおし、沖縄県立那覇養護学校（当時）の高等部設置の実現に尽力しました。

スタッフのあいさつ

「あひるの会２０周年によせて」　　津　山　　睦

先ず二十歳のお誕生日おめでとう御座います。改めて２０年の歳月を振り返ると本当に色々な出来事がありました。療育センタースタッフより障がい児を対象に水を通してのリハビリを図るサークルをたちあげないか？と相談を受け不安一杯のスタートでした。

立ち上げ当初は勉強会等で障がいについて学びました。会員各々の障がいをスタッフで周知し、可能な動き・避けたほうが好い動き・声かけの仕方等を考慮しメニューを組みました。グループも大きく二つに分け前半を動きの多い主に知的障がい児・後半を動きの少ない身体障がい児を対象に団体・個別の練習メニューで進めていきました。

メニューの変更等はありましたが今後もレベルアップを図るべくメニューの変更を検討していきたいと考えています。この２０年でたくさんの子ども達の笑顔に出逢いパワーを貰いました。子ども達及びご父母の皆様の一生懸命の姿勢に励まされ現在があります。本当に感謝!!感謝!!です。有難う御座います!!

今後の課題として後進の育成が挙げられます。若いボランティアが来てくれるのですがなかなか続きません!!現スタッフもあひるの会同様２０年の歳月を重ねて体力の低下等、厳しい現実があります。

今後も体力の続く限り、あひるの会のスタッフ及びご父母の皆様と一緒に”共に白髪の生えるまで”歩いていきたいと考えています。手を取り合ってゆっくりのんびり歩いていきましょう!!

「あひるの会２０周年によせて」　　柴　田　信　行

スタッフ４名の「ツヤマ水泳教室」のプールを使用して「あひるの会」が歩み始め、ツヤマ水泳教室の指導員及びあひるの会スタッフとして７年間活動しました。（４名のスタッフ内３名があひるの会に参加しました）

ツヤマ水泳教室の水温は一般的な３０℃であり、冬場動きの少ないこどもにとっては寒かったので途中から今の「サンアビリティーズ浦添」の施設も使用することになり、午前中 10 時から 12 時までをサンアビリティーズ浦添（動きの少ないこども）午後 1 時 30 分より 2 時 30 分までをツヤマ水泳教室（動きのあるこども）としました。

あひるの会を卒業できたこどもを３名ツヤマ水泳教室で受け入れました。

ツヤマ水泳教室が施設の老朽化により閉鎖して以後はプールの指導員はせず、プールに関連のない仕事をし 13 年間が経過しました。私にとって週１回のプールは楽しくリフレッシュの場でありストレス解消の場もあり、健康のためにも良いので、出来る限り参加するようにしています。

当初は勉強会及び記録をとっていましたが、ツヤマ水泳教室閉鎖後は勉強会はなくなり記録も残さなくなってしまいました。出席簿はとっていますが、これからは記録を残すようにします。

参加するにあたって心がけていることは、風邪等はひかないようにし、又精神的には穏やかな状態で参加するようにしています。

「いい仲間とステキな親子と共に・・・２０年」　　玉　城　珠　美

「プールを続けたいね」「療育センター以外に親子で行く場所があるといいね」とお母さんの声に、保育士の饒平名和子（現在城間）さんの呼びかけでスタートした会「あひるの会」

泳げない私・・・

療育センターの理学療法士酒井先生を中心にツヤマ水泳教室の水泳指導員津山・安仁屋・柴田先生でこども達に合わせた水の中での対応などみんなで勉強会をしました。２０年経って今も続けられているのは、こども達の少しづつ変化していく笑顔とこども達に向き合っているお父さん、お母さんの姿に支えられ、いつの間にか私自身の生活の一部になっている「あひるの会」です。

ある教室の日、プールの中で手足を動かしながら笑みを浮かべている A ちゃんの姿に A ちゃんのお父さんは我が子の笑顔に「A が自分のからだを、手や足を自由に動かし、手と足、からだを自分のものとして感じられるのはプールの中ですよね」と話されていました。

ゆらゆら揺れていると心地よく感じるのでしょう、いつもは緊張しているからだをリラックスさせていつの間にか寝てしまっていた K 君や R 君。慣れるまで大泣きしていたこどもも続けて来ることで笑顔を見せてくれました。

気管切開をした k 君・S 君、酸素を必要としている U 君や H ちゃん、その子に合わせた工夫でプールの中で笑顔をいっぱい見せてくれました。

口数の少ないお父さんがプールの中で我が子の笑顔に触れ、他のこども達へ声をかけている姿がありました。

スタート時に参加していたこども達は成人式を迎え大人の仲間入り、中・高生になって次へ巣立って行ったこどもたち、そして県外へ転勤引越しをしたこどもと家族。でも、時々懐かしく思い出したかのように顔を出してくれるこども達。

居場所つくり、笑顔に出会いたい、親子で水を介してのコニュニケーションつくりのためにスタートしたあひるの会。

人はお母さんの羊水に包まれて１０ヶ月、そして誕生、きっとプールって私たちに安心感をあたえてくれる場所なんですね。

ゆっくり、ゆっくりその子らしくひとりひとりにあわせた活動がこれからも続けられたらと思います。

いつも笑顔で受け入れてくださっているサン・アビリティーズうらそえの職員の皆さんにも感謝です。

課題は若いスタッフの参加！

新聞にとりあげられた「あひるの会」

琉球新報（夕刊）　1994年（平成6年）4月26日　火曜日　生活（4）

生活

「あひるの会」水泳活動

障害児にもプール遊びを

課題は条件整備

―地域でも取り組める療育活動―

公的助成制度の確立も必要

幼児を対象にしたスイミングスクールが盛況だが、障害を持つ子供たちにとって一般の施設でプール遊びや水泳活動をするには、まだ受け入れ態勢が十分整っていないのが実情だ。QOL（Quality of life＝生活の質）の向上が叫ばれるなか、水泳活動を通して、障害を持つ子にも地域での社会参加の場を、と模索を続けているのが「あひるの会」。

水泳指導員や理学療法士ら六人でつくる会のスタッフは週一回、那覇市内のスイミングスクールで障害を持つ子の水泳活動に取り組みながら、このほど一般のスイミングスクールを対象に受け入れ状況を調査。一般施設での受け入れが広がるためには、医療や療育機関が積極的にスイミングスクールとの協力態勢をとること、といった条件整備の必要性を訴えている。

地域の学校や保育園に通う子供たちが、珠算塾や水泳教室など多様な社会生活を体験しているのに比べ、障害を持った子は、病院や療育施設と家庭との往復以外、社会活動に参加できる機会の少ないのが現状。あひるの会では、プール遊びをはじめとする水泳活動を「地域で取り組める療育活動」と位置付けて、一九九一年五月から活動を始めた。

現在、会の子供たちは三歳から六歳までの二十四人。那覇市心身障害児療育センターの通所児童や、保育所、幼稚園に通っている自閉症やダウン症候群の子が四分の三を占め、重症の心身障害児もいる。子供たちは週一回、那覇市首里のツヤマ水泳教室と浦添市のサンビリティーズうらそえ（重症の子だけ）に分かれ、スタッフの指導を受けながら親子でプール遊びなどを楽しんでいる。

ことし一月に実施したスイミングスクールの受け入れ状況調査では、本島内の二十四施設中十四施設が回答した。それによると障害児対象のクラスを設けたスクールはゼロ。受け入れているのは十施設だが、その条件として歩行やコミュニケーション、排せつなど、最低限の日常生活動作が自立していることを挙げている。

受け入れにくい要因として、スクール側に「障害についての専門的知識がなく不安」「指導員の手間がかかる」など受け皿の未整備がある。

また、一般のスイミングスクールが設定している約三〇度の水温では、自発運動が少ない重症児にとって体が冷えるようで、三二～三三度が適当だと分かった。

療育活動の一環として、水泳を実施するのは全国的な傾向といい、あひるの会では、浮力のある状態で随意運動が促せる水の特性を利用。水泳の効果を即、機能の向上に結び付ける見方は避けており、スタッフの一人、酒井洋さん（理学療法士）は、療育効果の評価というより「病院や施設での療育、機能訓練とかでなく、定期的に戸外に出る機会をつくれたのが大きい」と話し、QOLの向上に期待する。

酒井洋さん

あひるの会は、スタッフのボランティアでスタート。民間の水泳教室も無償で提供してもらっ

親子でプール遊びを楽しむあひるの会の水泳活動＝那覇市のツヤマ水泳教室

た。二年目で保護者からの会費を募り、年間八万円で運営。九三年度から那覇市の地域福祉基金からの補助金事業として年額九十万円のバックアップを受けている。

だが、同補助も支援期限があり九六年度以降の適用はないという。

一般のスイミングスクールで障害を持つ子の受け入れが広がるためには、関係機関の協力のほか、療育、機能訓練を含めた指導方法や、公的助成制度の確立が急務のようだ。

◇「集団遊びはとへ」は休みました。

琉球新報　1994 年 4 月 26 日

沖縄タイムス
1994 年 9 月 26 日

'94.9.26. タイムス

障害児の体力向上に効果

歩けるようになった／人の話 聞けた

「水泳を始めたころから歩けるようになった」「先生の話が聞けるようになった」。外出や公園で友達と遊んだりする体験に乏しい、障害をもつ乳幼児のための親子水泳教室が那覇市内にある。全国的にも少ない水泳教室は、水泳指導員や保母、理学療法士がボランティアで開いている。

「あひるの会」の水泳教室

健常児クラスに3人が参加可能

三年余の間に、健常児のクラスに参加が可能になった〝卒園者〟も三人。子供たちは水遊びを楽しみながら体力が増加、生活指導の面なども含め、さまざまな面で効果を上げているようだ。スタッフや父母らは「普通の子供たちと同じような接し方で十分対応できる。いろんな地域で教室ができれば」と願っている。

ダウン症や自閉症、脳性マヒなど、寝たきりの重症の子供も含めて教室を開いているのは「あひるの会」（代表・酒井洋那覇市療育センター理学療法士）。那覇市療育センターを卒園した子の母親が、保母に活動する場が少ない、と相談したことなどがきっかけ。一九九一年五月に始まった。

酒井さんは「小学校入学前の乳幼児は、定期的に参加できる地域活動の場がない。また、子供は大きく、重くなるし、外に出ることがおっくうになる親もいる」と指摘する。

教室は毎週一回、六人のスタッフが約一時間、指導に当たっている。障害の程度で、二十人の子供たちを二つの教室に分けている。軽度の子供たちは、前半は輪になって集団で活動、後半はマンツーマンの個別指導で濡ったり、ばた足の練習。重度のクラスは、親や指導員の両手に支えられて浮力を体験する。

全国的にも例が少ないため指導方法が確立されていない。このため水泳の効果を判定する「評価」がない、という。

自閉症の子の母親（四〇）は「人の話が聞けるようになった」。一年間、健常児のクラスに通ったことがあるが、すみっこで一人で遊んで、まったく効果はなかった」と話す。

七歳の男の子の母親は「教室に通うようになった二年前から歩けるようになった。陸上よりもプールの中では歩くのが速いんです」と言う。「皆で海に行けるようになった」という家族も多い。

プールを開放し、自らも指導に当たっているツヤマ水泳教室の津山睦さん（三九）は「一般の子供と話しかける方、接し方は同じ。子供がマニュアルなので特別な対応は必要ない」。今では自分の水泳教室のすべてに障害者を受け入れ指導している。

酒井さんは「水温さえ気をつけて、スタッフのやる気さえあれば、一般のスイミングスクールでも十分指導できる」と話している。

95.9.26.

琉球新報 199

養護学校通学へ一歩

「私たちも学校へ通わせて」―。県内養護学校の訪問学級で、在宅を余儀なくされている重度の障害児を対象にしたデイケア「Steps」（ステップス）がこのほど那覇市総合福祉センターで始まった。

「Steps」が開校

在宅の重度障害児を対象に

親らがデイケア主催

「訪問から通学へ」ステップを踏んで、将来的には普通の学校へ通学できればとスタートしたデイケア「Steps」＝那覇市総合福祉センター

在宅重度障害児を持つ親やその療育活動を支える人たちで組織する「あひるの会」（酒井洋代表）の主催で取り組まれた。毎週金曜日の午前九時から午後一時までの間自宅から外出し、福祉センターを中心に公園の散歩、デパート見学、映画鑑賞などで「そとの空気」に触れさせて刺激を与えようというもの。

これらの重度障害児にとって同世代の子どもたちと一緒に学ぶことは刺激になり可能性が広がり、何より目の輝きが違ってくるという。「医者から聞くこともできないと言われた子がいまでは、ちゃんと声に反応する」とある母親は子ども同士の触れ合いの大切さを強調した。

二十二日行われた開校式には養護学校小学部一年生五人の児童が、おかあさんたちと一緒に出席した。現在、児童らは養護学校に在籍はしているものの学校へは行けず、自宅で週二回二時間ほど先生の訪問教育を受けている。

同会代表で那覇市療育センター理学療法士の酒井さんは「重度障害といっても吸引などの医療的ケアは必要だが、まったく普通の生活ができる。外へ出て行くことは子どもたちの刺激のためにもいいし、活動を通して重度障害児であっても集団活動、地域での社会参加ができることを分かってほしい」と呼び掛けている。

同会を支援している県立那覇病院小児科の宮城雅也医師は「子どもたちには刺激とリズムが大事、これまで保育園や幼稚園に通い、せっかくいいリズムができていたのに」と養護学校の在り方を含め行政の在宅重度障害児に対する理解を訴えた。

同会は将来的には公立小学校の音楽の授業などに参加させてもらって一緒に交流ができればと考えているという。

「障碍児・者水泳療法指導者養成講習会」

琉球新報　2004 年 4 月

第3種郵便物認可　2004. 4.　琉球新報

ネットワーク

本社・南部報道部 ☎ 098 (865) 5163 FAX 098 (865) 5176 Eメール chihou@ryukyushimpo.co.jp
宮古支局 ☎ 0980 (72) 3172 FAX 0980 (73) 5492 Eメール ryushin@gold.ocn.ne.jp
八重山支局 ☎ 0980 (82) 3428 FAX 0980 (83) 1382 Eメール yaeyama@plum.ocn.ne.jp

泳ぐ楽しさ共感しよう

障害者水泳療法で講習会 50人が指導法学ぶ

本部町

【本部】在宅障害児地域療育活動支援「あひるの会」、NPO法人「シー・カナリー」主催の「碍児・者水泳療法指導者講習会」が三月二十七、二十八の両日、本部町のマリンピアザ沖縄で開かれた。

あひるの会で障害児に水泳指導をしている指導員、障害者にダイビングを教えているシー・カナリーのメンバーのほか、県内各地の水泳指導者ら約五十人が参加した。講習会は初めての開催で、東京女子体育大助教授で理学療法士でもある覚張秀樹さんが講師を務めた。

覚張助教授はまず、車いす利用者をプールの中からプールサイドに上げる方法を伝授。そのほか、あおむけに浮くときに足が沈む場合は、ばんざいさせて重心を移動させる―ことなど、障害を持つ人に水を楽しんでもらうこつを指導した。

途中から県内の養護学校の子どもたちを相手に講習会参加者が実践した。覚張助教授は、子どもの上半身を支えた上で、足はぶらぶらとリラックスさせ「子どもが固くならないように」とアドバイス。子どもたちが楽しそうな表情を浮かべると、参加者たちは感心していた。

障害者に、水に親しんでもらう方法を学んだ講習会＝本部町のマリンピアザ沖縄

(平成16年)　4月2日　金曜日　沖縄

水泳療法

障害者介護の一助に 支援団体などが講習会

【本部】障害者がプールで遊んだり、水泳療法を受けたりする機会を広げるための指導者育成の講習会が三月二十七日、町内のマリンピアザ沖縄で開かれた。在宅障害児地域療育活動支援「あひるの会」(酒井洋代表)と、NPO法人「シー・カナリー」(田村僚一代表)の主催。

水泳療法に関心のある者や、障害児を持つ家族から約七十人が参加。基本的な注意事項の講義を受けた後、水着に着替えてプールで浮輪などを使った実技を学んだ。

講師の覚張秀樹東京女子体育大学助教授は、ほとんど力を使わずに介護相手の体を安全にコントロールする方法を次々と披露。「足が沈みそうな場合は、バンザイの格好で両手を上げてもらうと自然に浮く。立ち姿勢のときは、体を左右に傾けないことが大切」などとこつを伝授した。

介護者に囲まれながら体をプールに浮かばせた子どもたちは、珍しい体験に歓声を上げた。

浦添市で障害児向けのプール体験活動を続けている酒井代表は「水中では重力から解放され、自由な感覚を味わえる。子どもたちが外の世界を楽しむ選択肢の一つになれば」と意欲を見せた。

介護者と水中での感覚を楽しむ子どもたち＝本部町・マリンピアザ沖縄

同じく

「障碍児・者水泳療法指導者養成講習会」

沖縄タイムス　1994 年 4 月 2 日

琉球新報　2000 年 6 月 17 日

報（夕刊）　2000年（平成12年）6

はつらつ

障害児に水泳を指導

重度障害児の母親の「地域での行き場がない」という訴えで一九九一年から活動を始めた、親子水泳教室「あひるの会」。重度障害児や、自閉症の子どもなど水泳指導にかかわる。

が週に一回、サンアビリティーズうらそえのプールで水と親しんでいる。発足から同会の活動を見ている、代表の酒井洋さん(四)。理学療法士として、子どもの

「障害児への水泳指導はいい、とは以前から言われていたが、泳ぐ効果の前に親子が地域で外に出る機会をつくるのが目的だった」と話す。現在は親子三十組が会員として登録しており、毎回十組ほどが参加。水泳指導員、保母、小児科医師、理学療法士など合わせて六人が、子どもたちの

かせる数少ない場面。寝たきりの動きにくさとは違って、浮力で自分の動きを出すことができ、手足が自由に動くことが感じられる」と水泳の良さを説明する。また、自閉症児など体を動かすことのできる子どもへの効果は「プールという限られた空間で、人、場所、集団行動に慣れていく良い機会」と話す。

問い合わせは☎098(858)5206、同会事務局まで。

コミュニティ

新聞？
2004 年 4 月

ひと枠

酒井　洋さん（44）

在宅障害児支援「あひるの会」代表

水に親しみ、楽しんで

「水中では、体の制限や重力から解放されて自由になれる。水に親しみ、気持ちよさを感じてほしい」

障害者向けにプールでの遊びやリハビリなどの活動を展開している在宅障害児地域療育活動支援「あひるの会」の代表。那覇市療育センターで理学療法士としても活躍している。

毎週土曜日、身体・知的障害のある子どもやその親の十数組と浦添市のプールで体を動かす。

「療法やリハビリというより、楽しむことが大切。子どもたちが外の世界に出ていくきっかけになれば」と意欲。（浦添）